

■ 掲示板

□ 国内外の関連会議情報

開催期間	行 事 名	開催場所	関連ウェブページ
2019 年 7/31-8/3	第 16 回日本加速器学会年会 (PASJ2019)	京都大学吉田キャンパス (京都市)	https://www.pasj.jp/dai16kainenkai/index.html
8/20-28	第 13 回大学生のための素粒子・原子核ス クール サマーチャレンジ	高エネルギー加速器研究機構 (茨 城県つくば市)	
8/22-23	第 12 回放射線医学オープンスクール	放射線医学総合研究所 (千葉県千 葉市)	http://www.antm.or.jp/04_talent/03.html
8/26-30	FEL2019—39th International Free Electron Laser Conference	Hamburg, Germany	https://www.fel2019.org/
9/1-6	NA-PAC19—North American Particle Ac- celerator Conference 2019	Lansing MI, US	https://www.frib.msu.edu/events/2019/napac19/index.html
9/8-12	IBIC2019—The 8th International Beam Instrumentation Conference 2019	Malmoe, Sweden	https://indico.esss.lu.se/event/1158/
9/15-20	ERL2019—Workshop on Energy Recovery Linacs	Berlin, Germany	https://www.helmholtz-berlin.de/events/erl19/index_en.html
9/23-26	J-PARC2019—The 3rd J-PARC Symposium	つくば国際会議場 (茨城県つくば 市)	http://j-parc.jp/symposium/j-parc2019/
10/5-11	ICALEPCS2019—The 17th International Conference on Accelerator and Large Experimental Physics Control System	New York, US	https://icalepcs2019.bnl.gov/
10/28-30	2019 年日本表面真空学会学術講演会	つくば国際会議場 (茨城県つくば 市)	https://www.jvss.jp/annual/mtg2019/
2020 年 5/10-15	IPAC20—The 11th International Particle Accelerator Conference 2020	Caen, France	http://www.ipac20.org/
8 月	第 17 回日本加速器学会年会 (PASJ2020)	愛媛県松山市	
8/30-9/4	LINAC2020—The 30th LINAC Conference	Liverpool, UK	https://www.cockcroft.ac.uk/archives/tag/linac/
2021 年 5/23-28	IPAC21—The 12th International Particle Accelerator Conference 2021	Santos, Brazil	
	ICALEPCS2021—The 18th International Conference on Accelerator and Large Experimental Physics Control System	Shanghai, China	

■第16回日本加速器学会年会

以下の日程で加速器学会年会を開催いたします。奮ってご参加ください。

会 期：2019年7月31日(水)～8月3日(土)

会 場：京都大学吉田キャンパス(百周年時計台記念館, 国際科学イノベーション棟)

〒606-8501 京都市左京区吉田本町36

JR 京都駅からバス, 地下鉄等で30～40分

特別講演：7月31日(水) 18:30-20:00 百周年時計台記念館

塩瀬隆之(京都大学総合博物館 准教授(技術史担当))

「歴史的な物理実験機器と元素周期表から学ぶ物理・化学教育の歴史」

技術研修会：テーマ「加速器の運転・制御～AI技術/機械学習～」

8月2日(金) 百周年時計台記念館

中島悠太(大阪大学 データビリティフロンティア機構)

「AI/機械学習/深層学習入門」

8月3日(土) 百周年時計台記念館

小林由幸(ソニー株式会社)

「Neural Network Console と組込ボード SPRE-SENSE ではじめる Deep Learning の活用」

施設見学：8月3日(土) 午後

集合 京大吉田キャンパスからバスを用意予定(復路は京都駅まで)。

(1) 量子科学技術研究開発機構関西研(京都府木津川市, 人数制限200名程度)

- ・J-KAREN レーザー装置(見学窓から)
- ・レーザー駆動イオン・電子加速装置, マイクロトロン
- ・トンネル検査用移動式レーザー装置(時期が合えば)

(2) 京大宇治キャンパス(京都府宇治市, 人数制限40名)

- ・KU-FEL
- ・京大化研加速器群

懇親会：8月2日(金)夕刻より「みやこメッセ」で開催

参加方法：7/17(水)17:00以降は当日現地での登録のみとなります。受付にてお申し出ください。(参加費 学会員：7,000円, 学生会員：3,000円, 非会員：9,000円, 非会員学生：5,000円)

□関連団体からの報告

■高エネルギー加速器科学研究奨励会 奨励賞候補者募集要綱(2019年度)

趣 旨：加速器ならびに加速器利用に関する研究において, 特に優れた業績をおさめた研究者・技術者に次の4賞で構成される奨励賞を授与し, もって加速器科学の発展に資することを目的とする。

各賞の応募条件：

西川賞：加速器ならびに加速器利用に関する実験装置の研究において, 独創性に優れ, かつ論文発表され, 国際的にも評価の高い業績をあげた, 原則として50才以下(応募締切時)の単数または複数の研究者・技術者

小柴賞：素粒子研究のための粒子検出装置の開発研究において, 独創性に優れ, 国際的にも評価の高い業績を上げた, 原則として50才以下(応募締切時)の単数または複数の研究者・技術者

諏訪賞：加速器科学の発展上, 長期にわたる貢献など特に顕著な業績があったと認められる研究者・技術者・研究グループ

熊谷賞：研究開発, 施設建設など長年の活動を通じて, 加速器や加速器装置への顕著な貢献が認められる企業の加速器関係者

表彰件数：4賞合わせて5件程度

賞の内容：賞金(各賞30万円)と表彰盾(各課題毎)を授与する

選考方法：推薦のあった者について公益財団法人高エネルギー加速器科学研究奨励会選考委員会で選考し, 理事会において決定する。

選 考：2019年11月上旬

提出書類：

- (1) 推薦書(当公益財団法人のホームページに掲載の様式による)
- (2) 選考資料 研究業績に関する発表論文(3編以内)のコピー(各2部)

受付期間：

2019年6月1日(土)～2019年10月25日(金)

書類の提出ならびに問合せ先：

公益財団法人 高エネルギー加速器科学研究奨励会事務局

〒305-0801 茨城県つくば市大穂1-1 高エネルギー加速器研究機構内

■会告

□議事録

■第28回日本加速器学会評議員会議事録

日 時 : 2019年4月13日(土)14:00-17:00

場 所 : オフィス東京 L4 会議室

出席者 : 羽島 良一(会長, 量子科学技術研究開発機構), 宮本 篤(広報幹事, 東芝エネルギーシステムズ(株)), 柏木 茂(編集幹事, 東北大学), 古屋 貴章(庶務幹事, 高エネルギー加速器研究機構), 西森 信行(行事幹事, 量子科学技術研究開発機構), 長谷川和男(会計幹事, 日本原子力研究開発機構), 上坂 充(東京大学), 浦川 順治(高エネルギー加速器研究機構), 大垣 英明(京都大学), 大竹 雄次(高輝度光科学研究センター), 加藤 龍好(高エネルギー加速器研究機構), 上垣外 修一(理化学研究所), 神谷 幸秀(高エネルギー加速器研究機構), 金正 倫計(日本原子力研究開発機構), 黒田 隆之助(産業技術総合研究所), 阪井 寛志(高エネルギー加速器研究機構), 白井 敏之(量子科学技術研究開発機構 放射線医学総合研究所), 仙波 智行((株)日立製作所), 田辺 英二((株)エーイーティー), 内藤 富士雄(高エネルギー加速器研究機構), 中村 剛(高輝度光科学研究センター), 野田 章(量子科学技術研究開発機構 放射線医学総合研究所), 花木 博文(高輝度光科学研究センター), 浜 広幸(東北大学), 山口 誠哉(高エネルギー加速器研究機構)

議 事 :

0. 羽島会長より第8期評議員のうち21人出席により評議員会の定足数を満たしたため, 評議員会が成立したことが宣言された。
1. 宮本広報・ウェブ幹事より, 委員会の活動, ホームページ等について報告があった。平時の活動として, 学会ウェブページの情報更新を行っているが, 加速器関連施設情報や大学研究室の情報

については, 情報収集が追いついていないため, 気付いた点があれば連絡いただきたい旨の呼びかけがあった。

第14回年会より発表者に依頼しているプロシーディングス編集作業については, 今年も継続して行う予定であり, 1件につき1,000円を年会会計から支出予定である。

第15回年会より使用している参加費の決済システム「イベントペイ」では, コンビニ決済の学生利用率が高く, こちらも継続予定となっている。

ほか, 学会ホームページについて, <http://~>から, SSL/TLSによって暗号化されたやりとり可能な <https://~>へ移行し, 「社会に役立つ加速器」コンテンツに, 第13回年会(幕張)での特別講演を公開した。15回年会(長岡)での特別講演の動画についても公開に向けて編集作業中である。

前回評議員会で報告したオーラルヒストリーのウェブ掲載については, 対象となる方の推薦がなかったため, 初回は幹事会で人選の上, パイロット版としてウェブ公開とする方針である。

学会ホームページでは, 会員が住所や所属等の変更があった際にログインして登録情報の編集を行えるマイページを準備しており, 近いうちに実装を予定している。

また, 2018年7月から日本加速器学会のTwitterアカウントを運用し, 広報委員および会長が投稿を行っている。

質問

野田評議員 : 第14回年会での特別講演の公開予定はあるか。

宮本幹事 : 予定していない。

大竹評議員 : オーラルヒストリーは, 技術貢献賞の講師等はどうか。

宮本幹事 : 対象になりうると思う。

中村評議員 : マイページの開設・運用費用はどの程度か。たとえば, 年会発表とのリンクは可能

なのか。

宮本幹事：基本機能は無料で、特別な決済機能やカスタマイズを行うと経費がかかる。年会ページとのリンクはいずれ行う予定ではあるが、年会発表の情報は国際文献社ではなく、学会側で持っている情報のため、学会側で準備しなければならない。

2. 柏木編集幹事より、編集委員会および学会誌について報告があった。編集委員は、所属変更等にもとない、若干の入れ替えを行った。学会誌はおおむね順調に発刊中であるが、4月末発行予定の16巻1号は、GWが長いと、休み明けとなる。

4年前より毎4号にて特集を組んでいるが、4月6日の編集委員会で検討の結果、今回の第16号でも「加速器と超伝導技術」(仮題)をテーマとして、特集号とすることになった。

昨年度より、非会員に対しても1年を経過した学会誌記事については全て公開しているが、状況を見て、公開範囲・方法等を継続して検討する。

続いて、参考資料として2018年8月～2019年3月中までの学会誌記事のダウンロード数上位の論文一覧について提示があった。多いものでは236回のダウンロード数となっている。

このほか、学会誌の広告が減少傾向にあることが報告され、広告掲載の呼びかけ依頼があった。学会側としては、一定条件で割引にする等の検討を行っている。

3. 古屋庶務幹事より、年会以降に共催・協賛・後援を行った関連団体の行事について報告があった。続いて会員数について報告があり、会員数が微増傾向にあることが説明された。前回のメール審議後に入会希望のあった6名と1社について、入会が承認された。2016年度からの会費未納者について報告があり、5月末まで待って連絡・会費の納入がなければ、滞納退会とするため、評議員より分担して声を掛けることになった。

現在募集中の学会賞について、現在合計4件の応募があり、4月17日に選考委員会を行う旨の説明があり、選考委員のメンバーが承認された。

報告事項として、BNCT審査WG報告書(上坂評議員が協力)が完成して既に活用されていること、中性子学会との連携を進めていること、軍事

研究規制等に関するTFを立ち上げて議論を行っていること、若手の会の議論喚起について学会誌15巻3号に寄稿があったことが報告された。軍事研究の規制に関しては後で議論を行う。

また、2019年度は会長・評議員選挙を行うことを予定しているため、細則と大まかなスケジュールについて説明があった。選挙管理委員は、評議員を2期つとめて被選挙権のない方から、会長により指名する。

4. 西森行事幹事より、行事委員会および年会準備について報告があった。

行事委員に前行事幹事を正式追加したこと、プログラム担当の委員を1名追加したことが説明され、継続して年会運営のサポートを行っている。

続いて、長岡で行われた第15回年会についての報告と、今後の年会に関する変更点が説明された。まず、関係者の役割分担に混乱が生じた件について、マニュアル刷新、行事委員追加で分担を明確化した。参加費支払いシステムのイベントペイについては、参加申し込み後、一定期間内に支払いが無いと自動的に当該参加登録がキャンセルされる仕組みとなっているが、文面がわかりにくく参加できなくなったと誤解するケースがあったため、期間内の再度の事前参加登録または当日参加が可能であることがわかるよう、文章を変更した。年会賞は最終日の閉会式にて賞状を授与する形式となっていたが、受賞者の選定から賞状準備までに時間にあまり余裕がなく、関係者の負担が大きかったため、当日は仮賞状による授与式のみで、後日正式な賞状を送付することに変更した。著名な講師による特別講演と、広い展示会場については好評を得た。第15回年会決算は、新潟県からの補助金を含めても赤字となっている。

昨今は大学開催でも多額の会場費がかかることが多く、支出が増加傾向にある。第16回年会は参加費、懇親会費、企業展示の出展費をやや値上げさせていただいた。

続いて、京都で開催する今年の第16回年会について、会場や準備状況の説明があった。特別講演は7月31日(水)18:30-20:00に百周年時計台記念館にて、塩瀬隆之氏(京都大学総合博物館 准教授(技術史担当))による「歴史的な物理実験機器と元素周期表から学ぶ物理・化学教育の歴史」

技術研修会については、同じく百周年時計台記念館にて、「加速器の運転・制御～AI技術/機械学習～」のテーマで、8月2日(金)中島悠太氏(大阪大学 データビリティフロンティア機構 准教授)による「AI/機械学習/深層学習入門」、8月3日(土)に小林由幸氏(ソニー株式会社)による「Neural Network Console と組込ボード SPRESENSE ではじめる Deep Learning の活用」を予定している。

施設見学は人数制限があるが、8月3日午後に量子科学技術研究開発機構関西光科学研究所の各施設、または京都大学宇治キャンパスを設定した。懇親会は8月2日の夜にみやこメッセで開催する。

続いて第16回年会のタイムテーブルについて説明があった。初日の7月31日の合同セッションの後に萌芽的加速器技術の提案として、ショートプレゼンテーションの時間を設定している。技術研修会については、技術職の会員が参加しやすいように先日おこなったアンケートをもとに、2日目と3日目に設定した。ほか、新しい試みとして、庶務幹事報告にもあった中性子学会との連携で、「加速器中性子源の現状と展望」と称し、企画セッションを設け、パネルディスカッションを行う予定である。

2020年の第17回年会は、現地に実行委員がない松山にて、行事委員会と実行委員会に加えてイベント業者の協力を得て行うよう準備を行っている。会場は愛媛県県民文化会館で、懇親会は道後温泉の旅館を予定している。

2021年の第18回年会は、量子科学技術研究開発機構高崎量子応用研究所(高崎市)に共催を依頼し、倉島俊組織委員に御検討頂いている。場所は、現時点では2020年オープン予定の群馬県コンベンション施設となる見込みである。

2022年は未定であるが、九州地方が候補地として挙げられている。

質問

中村評議員(第17回年会組織委員長): 四国には加速器がないため、企業展示を控えるという話をきいたが、そのような傾向はあるか。

仙波評議員: 企業展示はあくまで出席者に対する展示なので、立地はあまり関係しないと思う。

神谷評議員: 参加費等の値上げによって第16回

年会では黒字になるか。

大垣評議員(第16回年会組織委員長): 予算上は、懇親会を除けば6000円の黒字である。ただし、懇親会を入れると20万円の赤字となってしまう。昨今、大学の会場費は教員等が借りても割引とならない可能性があり、頭の痛い問題である。

神谷評議員: 松山での第17回年会は赤字となるか。

中村評議員(第17回年会組織委員長): 会場費はそれほど高くなく、十分な補助金も見込まれるので、さほど不安視はしていない。

5. 長谷川会計幹事より、決算案等について説明があった。

2017年度決算までは、夏の年会での評議員会で承認、総会で会員に報告という流れで行ってきたが、納税申告を決算(3月末)から2か月以内(5月末まで)に行う必要があり、現状の決算案で仮承認の依頼があった。収入はほぼ予算通り、支出は会誌出版費用がやや超過しているものの、会場費、旅費、事務費は予算を下回った。また、予算に無かった支出として、納税分の54万円が発生している。現状の決算案で仮承認となった。

続いて2019年度の予算案について、2018年度の決算状況から反映した内容の説明があった。

まず収入について、2018年度と同程度の会員数を見込んで設定したこと、広告収入は減少傾向を反映している。

支出は、消費税の増税分、会誌の発行費の値上がりを見込んだこと、税務申告について、別途税理士を依頼して8万円の節約をしたほか、一部委託内容の値下げ交渉をしている。また、今年度から青色申告の承認を受けている。

今後の収支の見通しとしては、年会からの繰り入れを除くと、本予算で40万円ほどの支出超過が見込まれる。会費や決済手数料等の振込経費を本人負担とする等も考えられるが、大幅な削減は難しい。将来的な会費値上げ等の検討が必要である。

羽島会長より、年会会期中の会議で支給していた昼食について、参加者負担とする提案があり、承認された。

質問

黒田評議員：年度会費、年会参加費の課税状況はどうなっているか。

長谷川幹事：年度会費、会員の年会参加費は不課税、非会員の参加費は課税となる。

神谷評議員：近年の繰越金が減少傾向にある。年度会費を値上げする場合は、どの部分の経費が上がって影響が出ているのかわかるよう、グラフ等で示すとわかりやすい。

長谷川幹事：ご意見ありがとうございます。

大垣評議員：大学でも、小さなセッションで講義室を利用するならばそれほど金額はかからない。大きなセッションがある日を1日にするなどの工夫をすることは可能かと思う。

6. 加速器学会における軍事研究の取扱いについて、古屋庶務幹事より、昨年度倫理綱領の作成にあたり、議論未熟のため掲載を見送りにした軍事研究に関して、「加速器学会における軍事研究規制等に関するTF(タスクフォース)」(以下、軍事研究TF)を立ち上げて議論した経過について説明があった。

2回議論を行い、他の学会や大学・研究機関の対応について分担して調査したことについて説明があり、軍事研究TFで委員長となっている浦川評議員より、委員会の議論内容と論点整理があった。

経産省の輸出貿易管理令(及び外国為替令)によれば、加速器関連の多くのものが軍事転用可能な貨物(及び技術)として規定され、該当する貨物(又は技術)を輸出(又は提供)する際は原則許可が必要な規制対象である。学術会議の声明以来、学協会等では軍事研究に対する立場を明確にする動きが出ている。軍事研究TFでは状況を把握し、論点を整理することにより、会員による議論の材料を提供する。まず、軍事研究の定義について、人間や動物の殺戮や殺傷、対象物や環境の破壊等を目的とするものを、仮に「明白な軍事研究」とする。それに対し、「明白な軍事研究」に転用できる可能性がある、あるいはそれらを間接的に支援することを目的とする研究を「蓋然的な軍事研究」と区別する。現状の学協会では、「明白な軍事研究」を積極的に認めている、または無条件で許可するところは存在しない。大学・研究機

関では禁止や、審査等での判断をする例が多い。企業は、公開していないか、社会貢献を謳っているため、明白な軍事研究を積極的に認めているところはかなり少数と思われる。

加速器学会の理念としては「加速器科学、加速器技術およびこれ等に密接に関連する学問の進歩発展を図り、もって社会に貢献することを目的」(定款第2条より抜粋)、「第1条 会員は日本加速器学会の活動を通じて学問の発展と社会に貢献するため、不断の努力と自己規律に努める。」(倫理綱領)となっている。また、日本では交戦法規が存在しないため、積極的に明白な軍事研究を推進することは倫理的に問題があると思われる。ただし、直接の破壊行動につながらない蓋然的な軍事研究を含め、一律に規制してしまった場合、加速器関連の多くの研究分野が対象となりかねず、学会活動そのものの停滞が予想される。また、仮に学会で会員に対し制限をする場合でも、学会外の会員活動の制限はできないため、学会活動に限定することになる。

議論

神谷評議員：加速器関連の多くのものが軍事転用可能ということで輸出許可が必要とのことだが、そうではないのではないかと。実際には、(少なくとも)KEKでは、「ほぼ全て」経産省の許可はとっていない。輸出するものは、機構内で審査しているが、ほとんどは、経産省の許可は不要と判断されている。

黒田評議員：法令上該当するものは原則許可が必要であるが、通常は組織で該非判定を行っているはず。非該当の場合はもちろん許可は必要ない。該当の場合でも、組織が包括許可を受けている場合もある。どちらにせよ、規制対象から外れているわけではない。

上坂評議員：東大では輸出規制のあるものは報告対象。

浦川評議員：輸出した技術が軍事転用されると研究所の存続にもかかわる可能性がある。

大垣評議員：学会活動の範囲の規制か、会員個々の活動も含めた規制なのかは問題。会員への規制は所属先の問題なので、学会としては出来ないと思う。

浦川評議員：学会発表で、明白な軍事研究とわか

るものについてはどうするか。

大垣評議員：プログラム委員や学会誌の編集委員が、チェックするのは負担が大きい。

浦川評議員：この問題はパネルディスカッション等を経て2年ぐらいかけて検討することになると思う。

黒田評議員：防衛装備庁の委託事業（安全保障技術研究推進制度）に対して学術会議が声明を出し、各学協会がガイドラインを出すように促したため、大学等はそれに従った。学協会は声明に賛成したところもあるが、一部の報道情報によると日本工学会のような準拠しないところもあり、最近声明を出した天文学会のように数年かけて議論した上で安全保障技術研究推進制度に対する意見が世代によって大きく分かれている例もある。一度声明を出すと、学会としての立場を公開することになるため、慎重に対応すべきである。

学術会議の声明も単に当該委託事業への応募を抑制もしくは禁止したいがために出したように見える側面がある。国としては国家安全保障戦略においてデュアルユース技術を推進しており、その科学技術に対する予算を一般研究者向けに広く活用できるようにした結果が防衛装備庁の当該委託事業の公募であり、本来反発するような種類のものではないように思う。

もし仮に学会として何らかの規制を行う場合、研究発表や参加費の出資元についても規制しなければならぬが、そこまでは言及できない。

浦川評議員：防衛装備庁の当該委託事業募集要項には研究成果の公表を制限しない、特定秘密を提供することは無い、研究成果を特定秘密にすることは無い、プログラムオフィサーが介入することは無い、と明記されている。

神谷評議員：募集要項は、指摘をもとに修正を行ったものとなっている。

浦川評議員：明らかに軍事研究という年会発表があった時にどうするか決める必要がある。会員に周知すべき。

白井評議員：加速器技術はデュアルユースに密接にかかわっている。大強度加速器はSDIの予算で開発された歴史がある。世界ではDODの出資で研究発表を頻繁に行っている。一般で公開

してツアーで見せることもしていた。軍事研究かそうでないかの線引きが難しい。年会で参加者にアンケートをしても良いと思う。

大垣評議員：この議論を京都年会の合同セッションで私の話の代わりにいれても良いと思う。

神谷評議員：輸出入管理と軍事研究は別では。

黒田評議員：輸出入管理と軍事研究は別だが、法令上、「軍事転用可能な技術」として定義して具体的に規制対象がリスト化されている唯一の例のため、現状これ（輸出貿易管理令・外国為替令）を参考にせざるを得ない。

神谷評議員：明白な軍事研究と蓋然的な軍事研究は定義されているか。

黒田評議員：議論するための仮の定義である。言い方の例は他組織・他学協会にあるが、明確には定義されていない。各組織・学協会はなるべく軍事研究という言葉を使用しないよう配慮しているように思われる。

神谷評議員：軍事研究が法治国家ゆえにゆるされないというのは言い過ぎではないか。

大竹評議員：それぞれの意見があつて紛糾してしまうため、学会活動に限って、という枠を設けた上で議論すべきである。

神谷評議員：アンケートを取る際もその枠が必要と思う。

黒田評議員：アンケートの内容をどうするか。

宮本幹事：自分がアンケート担当になっていたが、設問を考えるのが難しい。もう少し方針が見えてからやりたいと思う。

浦川評議員：学会活動に限定すれば良いのではないか。明らかに年会発表での軍事研究の内容など。

神谷評議員：天文学会でのアンケートはどんな内容だったのか。

黒田評議員：天文学会のアンケートは安全保障技術研究推進制度に賛成か反対か、という内容が主体。充分議論をした上でアンケートをしているので、現状の加速器学会にそのまま持つてくるのは難しい。

白井評議員：天文学会の議論は加速器学会とは構成員も異なり、同じにならないと思う。

黒田評議員：方法は良いと思うが、中身は違う。

白井評議員：企業内には学会で話すことについて

規制があるか。
宮本幹事：基本的にはない。申請は出す。
白井評議員：学会発表をしている時点でオープンといえる。
大垣評議員：オープンにするから問題ないかどうかとも検討する必要がある。
浦川評議員：軍事研究についての学会発表をすることを、学会として許すかどうか。
大垣評議員：発表申込の際にチェックすべきかアンケートをしたほうがよいか。
浦川評議員：装備庁の出資による発表に対し、断るかどうか。学術会議に対し、どのような答えを出すかに関わっていると思う。
中村評議員：学術会議は軍事研究費による発表に対してどのような意見なのか。
宮本幹事：明快には何も言っていない。
羽島会長：今後の進め方としては、アンケートは早々にやってもいいと思われる。
古屋幹事：入会時の審査、発表中の議論が規制対象の場合はどうするか。年会発表では座長が対応しなければならず難しい。それらをしなければならぬか。
神谷評議員：事前に規制は難しい。発表後に後から問題を発見して、次回から規制ということはできると思う。
大垣評議員：入会申し込み時に条項にチェックを入れる等の簡単な方法で良いのではないか。
浦川評議員：非常に狭い範囲、武器や、明白な軍事研究ならばどうか。
宮本幹事：防衛に関わるものは別であり、武器といっても全面規制は難しく、微妙な話である。
羽島会長：武器の範囲が難しい。そのまま人を殺傷することができる技術も多い。
浦川評議員：入会時に文言を入れるべきではないか。
羽島会長：現状の倫理綱領で充分と思われる。
中村評議員：資金の流れが現状のデュアルユースに対するものから、より軍事的な方向に向かった場合、学会としてその流れを止めることは難しいと予想されるが、それを制限できれば良いと個人的には思う。また、たとえば年会での展示ブース出展のような宣伝に対してはどうか。

浦川評議員：学会活動の中と制限を付けて、アンケートについて早々に考えるべき。
古屋幹事：アンケートの内容も評議員でもむ必要がある。
浦川評議員：軍事研究 TF で検討したたたき台を評議員に確認する必要がある。
神谷評議員：アンケートは何回やってもよい。
黒田評議員：アンケートの際に資料がないとわかりにくい。資料もなるべく公平なものにすべきである。
花木評議員：本日の説明にあったような背景や、基本的な情報もなしにアンケートから開始しても思うような結果にならないのではないか。世代としては軍事研究反対となっているが、もともと軍事研究から派生した有用な技術は多く、興味は持っている。
神谷評議員：関心を持ってもらうためのアンケートでも良いかと思う。
白井評議員：総会で本日のような内容を説明し、その後アンケートはどうか。
浦川評議員：もう一度軍事研究 TF で議論して、どのように進めるか検討。
上垣外評議員：軍事研究の定義が難しいと思うが、TF ではどのように整理したのか。
浦川評議員：個人的には軍事でも国を維持・管理するための技術と殺戮のための技術は違うと思うが応用はできてしまう。分類することも混乱の原因となる。これから会員のコンセンサスをとりたい。
野田評議員：最後は会員がどのような意識をもつかどうかである。
黒田評議員：会員には極力、個人的な意見や思想を入れずにバックグラウンドを説明してからアンケートを実施したい。
※上記議事録に対する補足情報：軍事研究 TF では、上記の評議員会における議論の論点整理、及び軍事研究 TF 内での議論の状況について、第16回年会における総会での報告を予定している。また、本件に関するアンケートを今年度後半に実施する方向で準備を進めることとした。

■会員移動 (2019年4月～6月)

〔一般会員入会〕

金岡 耕平 (三菱重工機械システム(株))
平井 敦彦 (住友重機械工業(株))
相馬 信二 ((株)グラビトン)
奥村 進 (量子科学技術研究開発機構)
中川 規明 (大阪府立今宮工科高等学校)
石田 椋也 (ニチコン草津(株))
大戸 豪士 (ニチコン草津(株))
織茂 聡 (量子科学技術研究開発機構)
柴田 晃太郎 (東北大学電子光理学研究センター)
平田 洋介 (量子科学技術研究開発機構)
山口 隆宣 (マルイ鍍金工業(株))
Chouhan Vijay (高エネルギー加速器研究機構)
寺澤 弘陽 (アジア航測(株))
堤 和昌 (日本アドバンステクノロジー(株))
柏木 美恵子 (量子科学技術研究開発機構)
田丸 哲也 (関東情報サービス(株))
岡田 謙介 (高輝度光科学研究センター)
阿部 充志 (高エネルギー加速器研究機構)
若竹 亮 (戸田建設(株))
小野 礼人 (日本原子力研究開発機構 J-PARC センター)
岩井 瑛人 (理化学研究所)
中山 響介 ((株)パルスパワー技術研究所)
中田 恭輔 ((株)パルスパワー技術研究所)
間瀬 一彦 (高エネルギー加速器研究機構)
盛合 靖章 (産業技術総合研究所)
熊谷 公紀 (量子科学技術研究開発機構)
邱 丰 (高エネルギー加速器研究機構)
小松 雄哉 (高エネルギー加速器研究機構 素粒子原子核研究所)
鈴木 研人 (高エネルギー加速器研究機構)
菅原 賢悟 (近畿大学)
羽江 隆光 ((株)日立製作所)
Liu Yi (Institute of Fluid Physics, CAEP)
橋本 英子 (東京大学大学院)
王 旭東 (高エネルギー加速器研究機構)

武藤 史真 (高エネルギー加速器研究機構)
湯浅 貴裕 (高エネルギー加速器研究機構)
井田 博之 (JFE エンジニアリング(株))

〔学生会員入会〕

Murakami Tatsuki (早稲田大学)
大塚 誠也 (早稲田大学)
小柴 裕也 (早稲田大学)
山田 悠樹 (東北大学)
四塚 麻衣 (名古屋大学)
杉田 萌 (茨城大学)
菅 啓大 (京都大学複合原子力科学研究所)
丹羽 智朗 (早稲田大学理工学部)
山口 孝明 (総合研究大学院大学)
王 迪 (総合研究大学院大学)
高橋 光太郎 (総合研究大学院大学)
大本 恭平 (大阪大学)
地村 幹 (東北大学大学院)
森田 希望 (東北大学電子光理学研究センター)
田島 正規 (京都大学)
黒澤 歩夢 (日本大学)
岡崎 大樹 (日本大学大学院)

〔名誉会員入会〕

田中 秀之

〔賛助会員入会〕

伯東株式会社
株式会社トーキン
鈴木機械株式会社

〔退会〕

6名

■訃報 (2019年4月～6月)

以下の会員が亡くなりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

小山田 正幸
佐藤 勇

■編集後記

平成30年4月から編集委員を務めさせていただき、この1年で学会誌に対する思いが大きく変わりました。原稿を執筆いただく方々はもちろんのこと、編集委員長を中心に編集委員と事務局の多大な努力の賜物として学会誌が発行されていることを知り、手元に届けられる学会誌がとても愛おしくなりました。

本号は、巻頭言、解説2編、話題2編、談話室、会議報告1編、及び編集後記で構成されています。解説では、第15回年会技術研修会の講義内容を記事にさせていただきました。話題は、J-PARC、及びIFMFに関するそれぞれ読み応えのある内容です。巻頭言、談話室、及び会議報告は、懐かしく、楽しくお読みいただけるものと思います。

編集後記を執筆するに当たり、前号の編集後記をうけ、創刊号の会告に記載されている「加速

器学会誌について」を確認しました。そこに、編集方針として、以下の4項目が記述されていました。(1)原著論文を基礎とするJournalとはしない。(2)加速器学会の対象となる領域の話題や活動状況の理解を学会員に広める。(3)賛助会員のページを設けるなど、広く企業や関係者の状況に留意する。(4)楽しく読むうちにアイデアが沸き上がるような記事を目指す。

5月に元号が平成から令和に変わり、新しい時代がスタートしましたが、学会誌の原点である編集方針を顧みながら、これからも多くの方々が、たくさんのアイデアが沸き上がるような学会誌を目指した編集を心掛けたいと思います。

日本原子力研究開発機構
金正 倫計